

資料をよむ

～立川文書に見る中世の立川氏～

古代・中世部会部会長 鎌倉佐保

はじめに

立川市の市名は、鎌倉時代の立川郷（立河郷）に由来します。この立川郷を名字の地として本拠に定めた武士が立川氏です。立川氏の末裔が大切に保管してきた鎌倉時代以来の古文書（立川文書）が残されたおかげで、いま私たちは鎌倉時代の立川氏について知ることができますが、まだまだわからないこともあります。ここでは立川文書のいくつかをご紹介しますが、その疑問も示しておきたいと思います。

1. 今に伝えられた立川文書

まず、立川文書がどのように今に伝来したかをご紹介します。鎌倉時代立川郷を本拠とした立川氏は、戦国時代には関東一帯を領国とした小田原北条氏に仕え、北条氏が滅亡した後、水戸徳川家に召し抱えられ武蔵国を離れました。水戸藩に仕えた立川氏は、明和5（1768）年、立川重房の時に追放処分を受け絶家しました。水戸立川氏のもとに伝えられていた鎌倉時代の古文書は、立川重房の娘が嫁いだ郷医諏訪氏に伝わり、江戸後期の文化11（1814）年、水戸藩士で水戸藩や常陸の古文書蒐集や地誌編さんをおこなった小宮山楓軒^{こみやまふうけん}によって記録されました。小宮山楓軒編の地誌『水府志料』^{すいふしりょう}のなかに記録された9点の古文書の写しがそれにあたります。しかし、その文書の原本は長らく不明のままでした。

立川氏には、水戸藩に仕官した立川氏とは別に、それ以前に常陸太田の佐竹氏の家臣となり、その後も常陸太田に留まって帰農した一流がありました。小宮山楓軒に写された古文書の原本は、この常陸太田の立川氏に伝えられていたことが明らかになりました。その文書は、平成12（2000）年立川章氏より立川市に寄贈され、現在では立川市歴史民俗資料館に所蔵されています。立川章氏が伝えた古文書は、卷子2巻に仕立てられた14通で、14通のうち9通は『水府志料』に掲載された文書の原本でした。また『水府史料』に掲載されていない5通は、原本ではなく写しでしたが、それまで知られていない新発見の鎌倉時代の古文書の写しでした。

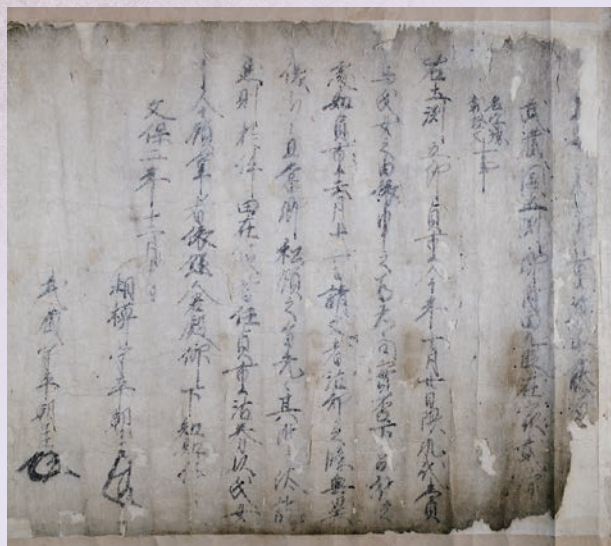
さらに翌平成13（2001）年、同じく常陸太田の立川氏の末裔の立川明子氏の家から、鎌倉時代の古文書原本3通が発見されました。これは立川章氏旧蔵の写し5通のうちの3通の原本であったことが判明しました。これによって立川文書は、12通の原本と、2通の文書写し、計14通の存在が判明しました。以上の立川文書の伝来、一通ごとの写真や詳細は、立川市教育委員会『立川文書』（平成29年11月30日初版二刷）に詳しく掲載されていますので、これをご参照ください。また市史編さんでも改めて立川文書を精査し、資料編に掲載する予定です。

2. 系図に見る立川氏

では次に、系図で立川氏について見ておきましょう。立川氏は、日奉氏^{ひまつり}という氏族の出自です。日奉氏はもともと太陽神をまつる祭祀集団として中央・地方に配置された日奉部^{ひまつりべ}に由来しますが、武蔵の日奉氏は、11世紀後半に武蔵国に土着し、国衙在庁官人^{ざいちょうかんじん}（国府の役人）となり武士団として発展していきました。そのうち武蔵国の馬牧のひとつ由比牧（八王子市四谷町・式分方町一帯）を本拠として由井を名乗った宗弘の子孫が、田村・土渕（日野市）、立河（立川市）、由井を名字とする家にわかれていきました。系図では宗時という人物から立河を名乗ったことがわかります。時代はおそらく平安時代末期か鎌倉時代の初め、12世紀末頃かと推定されます。右に掲げた系図は、日奉氏の一族小川氏に伝来した系図から作成してものですが、「〃」で示したところは名前が伝わっていな

この人物は、系図では宗重流に彦太郎を名乗る人物がいたことがわかっていますが実名は伝えられていません。重行については、鎌倉幕府の正月行事弓始行事の記録『御的日記』^{おまとにっき}に、正和5（1316）～嘉暦3（1328）年の間、射手として行事に参加していたことが見られます。この行事の参加者はほとんどが得宗被官^{とくそうひかん}（北条得宗家の家人）であったことがわかっています。重清と同時期に、得宗被官となり幕府に出仕していた立川氏を代表する人物が重行であったということになります。立川氏のなかにも複数の系統があったと考えられます。

4、立河重清・妻藤原氏等の土地集積



写真②文保2（1318）年12月10日関東下知状（立川氏文書第1巻7号）

立川文書のなかの一通を読んでみましょう。文保2（1318）年12月10日、鎌倉幕府から出された関東下知状という形式の文書です（写真②）。日付のあとの署名は相模守平朝臣とあるのが当時の執権北条高時、武蔵守平朝臣が連署金沢貞顕です。これは、立河彦四郎重清の妻藤原氏が、武蔵国土渕郷内の田9段（約9,000㎡）と在家2字を買い取って、鎌倉幕府に確認と安堵を申請し、幕府が承認したものです。これによれば、藤原氏は、文保2年の10月20日に土渕五郎貞重からこの田と在家を永代買得しました。幕府は、藤原氏からの安堵申請をうけて実否を確かめたところ、11月12日に売主土渕貞重から「沽却^{こきやく}の条、異儀なし（売却したことは間違いありません）」との請文^{うけふみ}（返答書）が出され、また土渕郷が幕府からの恩給地ではなく私領であり売買可能な土地である

ことが確認されたため、幕府は藤原氏の領掌を認めました。このように買い取った土地の安堵を求め、それを承認^{ばいとくあんど}することを買得安堵^{ばいとくあんど}といいます。

このように、立河重清をはじめ、妻藤原氏、子得王丸（重継）等は、土渕郷や立河郷、小河郷などの田地や在家を買い取って、幕府に申請して買得安堵を受け、その領掌の承認を得ていました。問題は、なぜ重清・妻藤原氏等は、これらの田地や在家を買い取っていたのかです。買い取る側に理由があったのか、あるいは売り手の側に何らか理由があったのかはわかりません。これは残された史料を読み解くなかから推測していく以外にありませんが、注目されるのは、売り手が土渕氏、立川氏、小川氏など、その多くが日奉氏の一族であったことです。当時御家人たちは、蒙古襲来による警固体制によって大きな負担がのしかかり、銭貨調達のために迫られていました。土地の売却に際して、できるだけ一族以外への土地の流出を防ぐため、一族間での土地売買がなされていたのかもしれませんが、しかし、一族間の売買であっても、売買された土地をめぐる訴訟が起こることもありました。藤原氏が上記の田・在家とは別に土渕貞重から買った在家1字について、貞重（法名定喜）から押領しているとの訴えが出され、改めて売買の事実の確認がなされています（嘉暦4（1329）年8月7日関東下知状）。買い取った側（重清・藤原氏・得王丸）が、その買得のたびに幕府に買得安堵を求めたのは、買得した側にも土地集積の積極的意図があったことがうかがえます。

このように、立川文書から立川氏一族や周辺の所領などについてさまざまなことが明らかになってきました。しかし、まだまだわからないことも多く残っています。市史編さんではさらに調査・研究を進め、少しでも疑問を明らかにしていければと思います。